



繪本漢楚軍談  
三

~ 13  
3565  
3





門 13  
號 3565  
卷 3

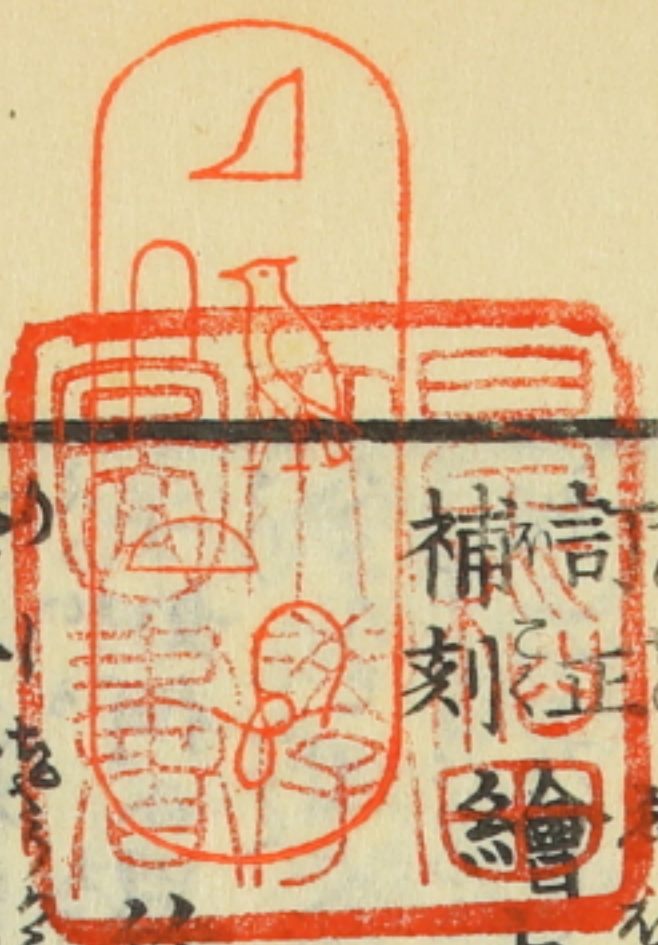
補刻繪本漢楚軍談初輯卷之三

東都

鷓鴣貞高箕蔡述

第四回 劉邦降沛縣靡赤旗

李斯趙高が常の野忌扶藜蒙恬の二人あり。既に殺して外は憚者  
無き二世皇帝を勸り専ら殺伐を行へり。天下の政を心の儘に執行ひ  
此の因て遠も近も悉く之を恨み盜賊蜂の如く起りて山東山西河南河  
北殊呉楚の間より軍馬の騷動止時なり。此頃楚人の陳涉呉廣と云者二人  
漢陽の番の起ると士卒九百人を預て大澤と云郷を以て出ける。大雨の  
遇て為方無く路は逗留為りける。定の日限相違けり。斬罪の如く行  
はんと之を危く懼らる。士卒に向ひて云ける。我等大雨の為に碍らる。日  
限を違へり。頸刎らるべし。必定する。縦幸ありて免まらうとも。何頃までと



早稲田 大學 図書館  
昭 34.6.3 購  
藏 書



云限もる漢陽の番の老去て十の七八の死失らん鬼ても死らん命もらば  
 國めて死が可らまや今天下の蒼生秦の苦こと日久く吾聞の二世皇帝の  
 少の子も七不當立當立者ハ公子扶蘇あり扶蘇ハ數諫る故を以て  
 不得立先年上郡の軍を統て御在を二世皇帝ハ之を殺せり百姓其  
 賢を聞て惜りて死するや否やを未知と云又楚の大將項燕ハ數國ハ功  
 有て士卒を愛さるる楚の國人ハ今も七猶之を憐りる此中の  
 扶蘇と項燕ガ在と稱無人為天下倡る應ざる者も多るや且ハ杜  
 士ハ不死已えの死んざる時ハ必しも大名を擧げて侯王將相寧有種  
 乎如何の思を問けり徒屬どもハ口を揃へて實ハ以て承るれば敬んで受  
 令んと固答す然る事ハ興さんと先詐て太子扶蘇楚の項燕と稱つ  
 祖右大楚と稱壇と為て祭とる一叔陳涉ハ自立て大將軍とす一程ハ

呉廣と都尉とぞうふける此事を起さ始ハ陳勝呉廣と商議して事  
 大体不定と猶疑しき所也ト者ハ許ハ行之とト呉トと云トト者ハ  
 其指意を知り足下方の事皆成て功有ん疑る然ども足下達ハト  
 之鬼乎と曰ハ兩人ハ其意を悟る於是教る衆を威を以てさる而已と  
 西帛ハ丹以て書人の罾して得る所の魚の腹の中ハ入置り士卒ハ  
 斯と知らざれば魚を買て烹て食ひ書を得て之を聞見るハ陳勝王とん  
 事有ハ程の人々之を怪しむ又問ハ呉廣と為て次る所の傍る叢の  
 中の祠の中ハ火を構へ狐の啼如くして曰まらハ楚國興て陳勝王と  
 楚國興りて陳勝王と頻り呼ぶるやあむらぬぞ士卒皆夜徹燭を以て且  
 日ハ往々ハ勝と廣とを指さ見けり陳勝呉廣ハ素より七人と愛する  
 故らハ士卒多く之が為不用らんと人事を願ひけり却説陳勝ハ汝南郡の

新編漢書卷之三 文選卷之三  
 二



陽城の人あて少く一時貪く七人と俱に傭耕を為しけるが、輟耕不  
 罷の上の行つても、悵然き顔する事甚久し、ちて曰ける、我若富て貴  
 成べ相忘る事無らま、傭者笑て曰、汝傭耕を為て何の富貴か  
 有べたを取取わば大息と、嗚呼、燕雀も安知鴻鵠之志乎と空  
 仰向て居るが、後陳王と成し時、此者聞て陳小行叩門て云ける、吾  
 涉字あり陳勝と見ま、欲ま是と開と云け、宮門令大怒り之と縛  
 らんと為る程、自辯數しと乃置ま、出けるが、此事陳勝の通せざら  
 或時陳勝が出ると伺ひ道を遮りて涉と呼陳勝、迺召て見り、載與小歸  
 け、宮殿帷帳などの美麗るを見て曰ける、夥るる涉が之為王  
 吏の沈沈と、訛言葉稱するける、楚人多を曰夥、天下故小傳之  
 夥涉為王と曰、吏陳勝よりぞ始まる、斷之續先緒、陳勝、吳廣の

吏始り大澤郷を攻取り、斬縣と下し、夫よりち東に向て發行き先  
 鋒、符離の人葛嬰と云者、兵と將つ、斬以東の縣を或は降、或は攻取  
 行々勢を収る程、陳の國に至る頃、數萬人を及びける、其外武臣、趙、項  
 梁、吳も起り、韓、廣、燕、田、儋、齊も起り、天下大紛亂、軍馬縦横、馳  
 還る、尔も二世之を知らず、酒を溺る色を淫して、日夜遊樂、耽り玉を  
 奏する者有とも、終日見る事と不泊き、此時沛の豊邑に劉邦字の季と云人  
 の、曾て聞劉氏の父母久し、見らた吏と愁ひて、大澤の堤、近き廟、祈  
 聰明の子と抄らんと、日毎の詣で、念らるる至心、丹誠を尽しけるが、或時又  
 劉氏夫婦、彼神廟に詣り、只向神靈を念り、下向の及ぶ途中、大澤の堤、  
 休居、不思草上、轉寢せ、最尊き神人現る、玉ひて、光輝く五色の靈玉を  
 劉氏の婦に賜り、汝等夫婦の丹心を神感在て、此靈玉と玉ふり、のち



胎教と慎みて出産の節を待たず一生子の最尊く其統長く継ぐこと  
尔一王の劉氏の婦其靈玉を捧げ茶を相戴き緯と問んと着向は  
是則夢とて打驚き目覚ま忽ち雷電晦冥と光龍天の出現あり  
此時より其婦の妊娠如く月満て安らふ劉邦を産りて後  
天下を統まる大業の正神靈感徳の應護るべし

一説小曰劉邦の母大澤の堤に休居て神と會合と夢見て娠を産  
子ありと云夫此條下劉邦其父母の尊りたるを衆人を伏さむ  
方便實不如是なりけるは右然も在神ありとも夫の婦の會合事  
最義なり説小とて神靈と敬ふべきや必妖魔邪神の所為又  
其如く妊娠の謂鬼胎と云の尊き支那の名医類案と  
の書小曰至正の末越夫婦二人在大善寺の金剛神の側縛草

縛草といふ草其婦居住ま其所一子を産り其形首の兩  
瘰額の角肉起て角の如く鼻孔昂縮一皆悉夜叉の形似  
蓋産婦の居住する所の金剛神と常なる者  
縁の觸感と偶此形と受得る古人の胎教謹まむべし不可有と記  
を有胎教と妊娠の中此推量劉邦の母神と會合と全く言觸損  
をの誤る若誤るも然在云劉邦の父太公を忸怩母を以貞  
劉邦の邪神不正の種漢の天子の太祖と稱する素生不祥と云假令  
正史實録をも神靈人間の媾と劉邦を産りと云天理不反異説を  
兼ごり蓋劉邦の隆準龍顔る受胎の最初九龍天の現る  
嚴靈の氣小感と云の  
亦も彼劉邦と稱する古今稀世の英才也其為人物隆準龍顔



左の股小七十二の黒子の廣人を愛し施まると好む。詔達大度ふと家産を修  
 るも年既壯及んで嘗て酒上の草の長と多し。素よりを甚く酒を好むを  
 貪り時觸て爲大言。諸人之を輕けける。亦も單父の呂文と云。劉邦の爲人  
 不當。見云けり。劉邦酒色を好む。諸人皆輕んぎ。時未至。若二且時。此ハ  
 其貴。少き。我娘呂顔と妻せ。婿の女房の大。怒ると是。何と云。云  
 我長女を以て。是。賤き人。嫁入せ。己王と云けり。呂文頭を打掉。否汝輩。知る。の  
 る。我見る所。の。云。邦と迎へ酒を勸む。我君が相を見。貴き。不可言。願ハ我  
 女を以て。君が箕芾の婦。爲王。以て。必違ひ。王。云。劉邦申されけり。我。三。支。不。立  
 一。の。幼。七。學。子。を。二。の。力。弱。七。無。勇。三。の。家。貧。七。自。贖。を。亦。之。之。以。見。時。爭  
 公の息女を娶妻と爲る。夏。の。人。を。辭讓。呂文ハ相返。我意既決。決。君。不。も  
 辭讓。王。去。來。其。婦。諸。俱。の。酒。有。を。以。て。餐。應。の。婿。姻。の。父。を。結。び。ける。亦。劉邦の

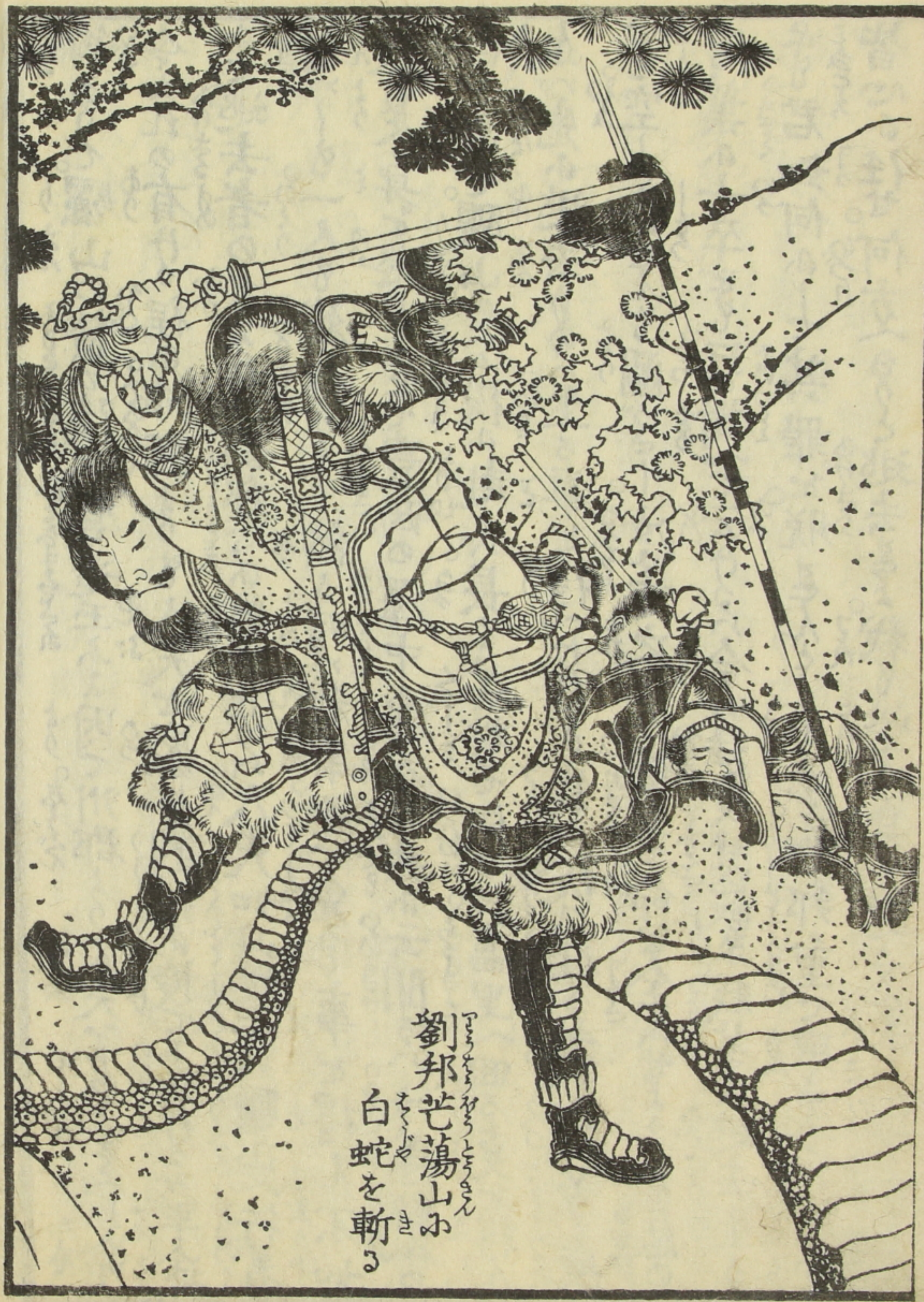
還と送つ。門外へ出けり。忽一人の勇士來り。身材堂々。威風凜凜。を  
 出來りて。劉邦の長。揮。て。此。程。數。日。も。足。下。の。遇。ん。と。尋。ね。ぬ。今。百。幸。の  
 相。遇。う。と。云。雷。の。如。く。重。呂文。心。の。思。ふ。久。此。ハ。真。の。盛。る。世。の。諸  
 侯。も。云。べ。し。左。見。右。見。つ。亦。て。云。劉邦を尋ねらる。如何。の。人。を。先  
 此。方。へ。招。き。入。て。姓。名。來。由。を。尋。問。彼。男。乃。答。て。云。け。り。其。ハ。沛。縣。人  
 樊。噲。と。云。者。多。身。貧。く。を。狗。屠。肉。を。賣。て。世。を。渡。り。此。間。劉邦と  
 尋。回。り。漸。々。此。所。へ。來。り。也。足。下。ハ。又。如何。の。人。を。願。ふ。姓。名。を。告。玉。と  
 言。は。る。呂文。答。る。其。某。ハ。單父。の。人。也。呂文。と。云。る。者。多。り。久。此。沛。の。地。の  
 客。居。し。有。程。小。常。の。足。下。の。名。を。聞。く。今。幸。の。相。遇。と。喜。悦。の。不。堪。と。云  
 酒。を。進。り。郷。食。應。ら。ぬ。重。ね。て。云。け。り。足。下。の。内。君。の。御。在。り。も。さ。や。と。問  
 け。り。樊。噲。答。て。某。ハ。幼。少。り。貧。賤。の。父。母。も。無。く。妻。子。も。無。く。云。呂文



又云其二人の娘あり姉の只今既の劉邦の妻なり其妹を呂須と名号  
 足下と與てを妻と為ん如何の事と許諾玉のんと問樊噲再三  
 辭て我足下の娘子と辱さる不足と云い劉邦傍より申さるけり今日  
 寔の千載の奇遇なり呂公の一日の中二人の娘を我々の許さる又奇  
 事なり呂公の人と相毎の若違と無らん他日我輩二人の者妻を  
 保の助有ん樊噲左の辭んくと教示は實もと許諾の醉を盡して別  
 けり亦は始皇帝東南の方の雲氣を奇玉の沛縣を巡狩し玉の時  
 劉邦の山に逃れ洞の隱して居玉の呂顏へ之を跡來りて食物と餉め  
 劉邦之を怪て何と我隱所を知り來りぬるやと曰い呂顏答へらく  
 君の居玉其上の雲の如く霧の如く貴き氣の立上る夫を指南の尋る  
 百の一も違と云い劉邦竊に悦び時の至るを待たける亦て始皇帝崩

御ありて驪山の麓の陵を營造玉ふ因て州郡より人夫を召上る命  
 今まの有ける程沛縣より人夫を聚り劉邦の授て上せけるが半途  
 のて逃去者の多うれば劉邦心の思ひけり人夫如此逃去ば驪山へ行着  
 時一人も殘住るま然る時我争罪を免る事を得ん不如  
 從是身と逃さんとて豊西の澤中の人夫共云聞る汝等縣令の  
 命を受て驪山の公役の赴る長く苦勞て何日舊里へ回る支を得ん  
 亦は先の逃去のの生る事を得べけれども我の從ひ住る者却て苦と瘦  
 て空しく死せんも圖が汝等之より逃去て命を全ふせんは慈の  
 言葉の士卒も口を揃へて云ける今の法度甚緊我等逃去生る  
 君如何の其罪を脱さんと玉ふ劉邦重て申さる汝等  
 皆心の任せ何方へ逃去と我も此より身を隱さん去來早去と急





劉邦芒蕩山  
白蛇を斬る

新編漢書初輯卷之三

大澤堂藏



士卒共の限る悦勇を拜謝して思ひくみ去けり。其中は  
 年壯者剛健者十余人劉邦と捨難く屬從して有けるが上下  
 酒を酌み夜小紛まて小徑より潛の走去る先に進むる者馳  
 回り大息して云けり。此路の前方の其長十丈たりも有んがらん大  
 蛇徑の横よりて通るべし様も。別の路より落行て禍害を免ま  
 らんと聞も不取劉邦の壯士路を行とて何の畏る事有ん皆我の從ひ  
 來と衣を攘て急の走り。劍を枝て躍り掛り大蛇を截て而段と路と  
 開て通しけり。相從ふ者皆驚て。劉邦の平生臆病の物の用の立ふ  
 不在と思ひ居り。今日の動作力を奮て勇る事世の常の及所の  
 ゆるぎと俱ふ。世の蕩の澤中の潛隱居ける。是の沛中の子弟も。劉  
 邦と尋來りて是の從ひ與る者。日々夜々の更りりける。近邊の百姓の

蛇を截する所へ行て見る。年老る嫗ありて毎夜來りて哭哀ゆ人  
 皆之を怪る。大蛇を殺して民の為の害を除去る。汝は何を哭く  
 ぞ。問へ。嫗は答へて。我子の乃白帝の子也。有るが過一夜大蛇と化  
 ち。此路を出る所を圖らざれば。赤帝の子も斬まらう。吾俗故以て身を  
 歸る所を哭く。語を聞人弥怪。此の何なる妖物ぞ。杖を以  
 撃んと為ける。嫗は忽馬消が如く形不見る。けり。尔程の劉邦大蛇を  
 易く斬て。四方の壯士來從ひ數百人。及ぶ程の漸勢の振の。猶  
 澤中の居り。沛の縣令の從吏も。蕭何曹參と云二人の者。秦の  
 暴虐を放み。賦税も重なり。天下の民怨叛て乱まんと為て。俱の  
 計策を運して。縣令を取立旗を揚んと思ふ心の有ければ。密に軍兵を  
 聚けるが。劉邦と素より。好深者なり。人々之を招きけるが。劉邦



之と打聞て大い喜び馳來まり相従ふ者共い樊噲等と始とい従ふ兵數百人勢の稍盛ぬ成ふける

第五回

項羽扛鼎降雙雉士

然れ縣令之と見て大い驚後悔し蕭何曹參を責て云けり汝等假の事を設け我を佐ると驕し却て外より人衆を招き我を欺き沛縣を奪と巧めり引出し斬んと怒りけり諸人大い歎き哀一命を乞請けり其夜蕭何曹參の同志の者數十人と竊に城を兼越て劉邦を見へて云様縣令の不才ふと俱の大事を議るふ不足公今勢の大なり此時の衆を沛縣を攻取り暫く人馬を屯しと義兵を興し諸國の勢を招き王の四方の豪傑響音の如く應じて後中天下を圖つべし早く心を定めて事を議王へて勸めけり劉邦這と聞て申さけり足下等我を佐

志のりんぬ計策を運して沛の城門を押開き縣令を斬殺し賢徳の君を立人望を遵つて大事必成成就せん其時蕭何申様今城中の百姓皆驚亂して安んず今夜書簡を箭の束で城中へ射入百姓の利害を陳示さ必内変を生じて日わくも城を下し其夜書簡を書認め城中へ射入ける其書簡の大意は天下秦の苛法は苦き久く民生を聊せむ故に豪傑並起る我今義を倡へ衆を聚む公議に従ひ沛主を擇往て諸侯小應下俱の大事を成人とも如再等城を開て早く降ば幸の屠戮事を免さん若し天命不順は城を破るの日及びして玉石俱に焚捨さん其時悔とも及ぶまどと記付て有ければ城中の百姓之を見て密に議アと云けり劉邦の為人尋常人の事くつて実の天の授り今兵を率つて此城を圍む何を以て防ぐべし蕭何曹參へ己の降まり城り破る



我等ハ悉殺さば人事疑ひハ不如早く降人となりて禍を免れんと評議を  
 遂速ニ府中ニ罷以縣令を殺し城門を開て降を請けしハ蕭何曹參ハ  
 諸人と相議て劉邦を沛縣の令とて民を治りんと云ハ劉邦固辭とて  
 方ハ今是天下乱れ諸侯國々蜂起を爲す苟も主を立て不善時ハ  
 百姓を害せん我徳薄く才疏し七恐く民を治り難ければ但宜しく  
 賢徳の人を擇て縣令とて蒼生を撫治せらばと云ハ皆口を揃へ  
 我輩久く劉邦の奇才のりて大貴とんと云風説を聞知り況て  
 今是ト基も劉季最吉とのも強而縣令と成玉ハ君尚強固辭  
 玉ハ我輩悉く逃去ん然ても辭退玉ふわと云ハ劉邦も許諾て了  
 立て沛縣の令と成せける故此より劉邦を沛公とて申ける蕭何曹  
 參樊噲等ハ沛の城中城外の父老者を引て一同大喜と演尔而旗幟を

立改て皆悉く赤旗を相立り夫赤色と尚ハ蓋赤帝の讖ハ應せり浩  
 程ハ十日を不過と沛中の子弟相聚りて三千余人及びければ陳  
 渉と交を結び共秦を伐んと商議を爲して居りける友ハ亦項梁嘗  
 人を殺せし事ありて以て甥の項籍と俱ハ仇を避て吳中の逃れ來りしが  
 吳中の賢士大夫ハ皆項梁が才智下まハ大線役のハ又喪の吏  
 あり有ハ母ハ項梁常此を教て主辨せり尔り程ハ項梁ハ陰ハ其の  
 法を以て賓客子弟を部勒し其能のを知らせけり尔て項籍ハ其身  
 の長八尺二寸在り程ハ力も飽まを強才氣又人ハ過り此を以て吳中の子  
 弟皆項籍を憚ける秦の二世の元年ハ陳勝旗を上り程ハ其年の九月ハ  
 會稽の假の太守殷通と云る者も旗を揚んと成りけるが項梁ハ賢者  
 平乃之を召寄て與ハ事を計るる項梁ハ云けり方ハ今是江より



西の皆秦の反くと聞けり思ふ此又上天の秦を亡す時なり先發の制  
 久後發の制於人自然の時勢如是と説を聞て敢通の嗟嘆し我聞夫  
 子の楚の國の大將の世家あり其世家も今の唯足下耳と兼王のりし  
 實の然もこと稱讚の項梁復曰けり吳の一人の奇士有て其姓名を  
 桓楚と云て澤中の在と聞人其所を知る莫し獨項籍是を知り  
 公試の問王へ曰つて立て項籍の事尔々と示つ陰の劍を持し外の方  
 待あり復元の如く座の着て太守の對て曰けり今項籍の外面の公  
 尔せんと思さんぬ項籍を召して使受令急ぎ桓楚を召し王へと勧め  
 太守も尔べと項籍を召入りけり項梁早く胸をうら項籍其意を悟  
 つ目と瞋して云けり我家の元楚の大將項燕が後るるに秦の爲の曾  
 是不俱戴天深讐の有る今汝の異之久く秦の禄を食ふて此の

太守成を恩の違義を忘れて叛逆を企立る大惡不忠の僻邪者なり  
 我故を以て汝を殺し世の人臣の不忠を爲の戒め爲んと劍を拔て殷通頭を  
 忽ち斬落其項梁其頭を持て太守の印綬を佩けり門下の子弟驚  
 擾をせ上と下へと返り其邦の入其主を殺して奪て自立者不義なり  
 是言罵廻ま項籍大の這を怒り劍を振て難廻る忽然數十百人を  
 擾して斬殪其此猛烈の辟易一府中の者其皆龍言伏敢復起る者  
 項梁此体の故人豪吏を召して論けり殷通は臣の故我今  
 之を殺し此地を借て義兵を興し楚の爲の讎を報ひ天下の爲の暴を除かん  
 汝等我を佐よと云ひ皆々領掌して遂に吳中の兵を率催して下々を縣  
 縣を収順せし季布鍾離昧と始と七精兵八千余人を得り於是猶も  
 豪傑を擇出して部署せり校尉侯司馬ると云官職を定め一人官

十一



職を得ざる者あり人皆之を怪む項梁は問けるを項梁笑て曰ける我  
 彼者其の時某の事を爲せぬ遂に之を辨し得ぬ故に之を用ひむと語  
 けむ皆々爾ても感服して口を閉て居りける尔て項梁は會稽の將軍  
 職を爲登り項籍を以て裨將と勢漸盛る或時項梁は項羽をむらひ  
 桓楚を招き來ると云へ項羽は異儀を許諾て李布の案内を爲り  
 塗山と云地の赴きける尔ても桓楚干英と云兩個の士は先年秦を避て  
 塗山の澤に隱居て精兵勇士を聚り領し賊を業と爲り居り斯る  
 所へ項籍は先辨舌者を使ひ楚の大將項梁が裨將項羽を遣て兩  
 將軍を見し其の武具を携へ大義を陳て民を救ん爲り而已ると云ふ  
 桓楚干英は取急ぎ迎へて對面を極寒暖の序話して項籍先申す様  
 秦無道を放り英雄蜂の如く起る天下今此殘暴を除き去て生息

塗炭の中より救へんと願はざる者更あり而將軍は殊更不世の稀なる  
 才器の當是天下の爲の殘害を除去せん如何と云ふ斯跡を藏し  
 山林の中へ徒月日を送り王ふぞ我今叔父の項梁と俱に兵を起し  
 秦を伐て六國の爲の仇を報ひ彼殘暴を除き去り此蒼生を救はんとき  
 爰の久しく二將軍の芳名を仰慕し自來りて大義を説く二將軍若  
 かと合せ王業を爲し心ゆく願ひ山を下りて叔父項梁を扶王と説論は桓  
 楚先是に答て曰ける秦は無道なりと云ふ其勢猶強大なり若世を  
 蓋の雄の如く之の敵する事能へば足下論義旗を揚這を撃んと  
 王ふも恐らく力不足とせん尔は足下の勇力を試し上るべしとて迂  
 濶の之の與難し若爲損むる事し有る畫虎て不成反て類狗と  
 云浮世の譬言の同くん尔の言と譯し項籍乃ち答て曰今何と





四十三



黒龍馬と  
化して  
里人を  
腦を

外本海軍軍談不轉卷之三

文治堂藏



五千石  
重八百  
貫目有

以て我齊力を量試玉ふべしと尋ぬ桓楚へまゐり此山の下の方の禹王の廟の  
 いか前より大なる石鼎あり其重さ幾千斤と云ふを知らず足下此を  
 推倒し又よき起し玉いんぬ齊力定ぬ天が下の無敵とも云ふべしと語を  
 聞け項籍へ亦行て見ゆとんと相共山を下り古廟の前みどり見ゆ果  
 然て大なる鼎あり高七尺あり一徑五尺程あり其重さ五千斤と  
 古昔より云傳ふ。項籍乃ち立ちよて一度推べ其鼎忽地上に倒るを又引  
 起し推倒し三度まで及べども強ち力を用ふる。体もゆれぬと易げの見えし  
 けは桓楚干英の兩個の大い之を敬驚歎て真の足下の御力の天が下の敵多  
 らんと稱讚べ項籍の微笑て是等の事へ左程迄奇特とまゐる足るべし。這  
 見玉へて衣服の袖を攘鼎の足の手を入れて中の持上げ古廟の四辺を三遍迄走り  
 廻り最輕々しく舊の所へ打置けし顔の色少しも変ざらぬ。桓楚干英の

忽ち地を跪き拜伏し將軍は是天神なり今日より我々願くは命を棄て  
 從ひ申さんと俱に隱栖へ伴ひ酒宴を儲之と饗應翌日人馬を引具て  
 打出し途中の百姓數多聚りと周章騷動居たりけし如何なる子細  
 ぞ之を問ふ衆皆答て曰けし素此塗山の澤中の黒き龍の住み此程化て  
 馬となり毎日南阜へ駈來り哮る声地を動かし走り回りて田を傷む故定ぬ  
 困り果つとも之を制まき方便なり。今將軍の此所へ來り玉いんぬ  
 願くは所の民の爲に害を除玉ふと曰べ項籍とを聞桓楚干英を伴ひて  
 澤の畔へ行見ぬ案の如く件の馬水の中より躍出哮ら怒つ前來て兩足を騰  
 邊の人を齧付んとする体の怖るし是支惡龍の黒雲を衆て飛行まじり如し  
 項羽は更怖る色き叱叫て走寄鬃鬃で馬の背に飄然と此架當下  
 澤の邊を馳る支十遍余り及びけし馬へ次身弱つ汗を流し淡と喘



躍駁る事も爲さうしう。叔徐々と歩せて又二里許を兼回しける。百姓皆  
敬馬き地を跪き再拜し喜稱讚其声の暫時鳴も静らむ。神変不思  
羨の所爲さうと語り傳て賞しける也。

第六回 項羽得而玉盛軍威

再説項羽の龍馬を驍鎮で訖然する所へ一人の老翁進出て長揖某久く  
將軍の威名を仰ぎ奉りし。今日幸ふ此所を過らせらるる民の爲小室を除  
去し一程公見へ奉りて平生の望も足りし。此上は願く暫く入馬を住玉を  
我茅屋の八玉酒を勧て渴仰の真情を度いといと慇懃他吉家  
る。曰ベ項籍、諸將を引其家に入る。老翁大に喜ひ酒を勧て饗  
應けし。項籍は是れ打向ひ如何る人を名を問ふ。老翁答て曰ける。某は  
虞姓の七常小村中の參會の弟一の列の居の。人皆我を踰して虞一

公の申さるる將軍の御年幾許と又内室の御在るやと問へ項籍は面答して  
我年二十四歳ふ。未妻を。迎む。語る。老翁又曰様某年老て只一人の  
女子を持て。此兒聰明貞静の。輕々しく笑ひ語らむ。幼少し書を讀で  
略其大義の通じ。此母此兒を孕時五鳳鳴于室と夢見て再して此兒を  
生れ。後必貴く。久く壻を擇て。今に至て不嫁。今將軍を見奉る。其  
其力能勇を扛勇萬人の敵。是蓋世の英雄。願へ將軍我女を  
箕第の婦と。玉と虞姫を呼出。見し。項籍を。倩見る。玉顔雪肌  
玲瓏。蘭花蕙質。芳分。傾國の色。絶。項籍大に喜ひ。虞  
公を拜し。約を固り。腰間を寶劍を解て。贈誓義を定り。紀と。人馬の騷亂  
為人事を恐。別を生。馬を早。會社。城の立。回。桓楚と干英を引具つ。  
叔父項梁。見事。由を告げ。項梁大に喜ひ。桓楚于英が。斜。を。する。



英雄の相従ふ子弟も皆々精銳の心勇を云のり又澤中より出  
 たる馬其長一丈許を高七尺程の真の龍馬と感賞し彌て烏錐と  
 稱する項籍の重て虞一公の約せし言を語れど項梁の這を悦び汝義兵を  
 起しとる人の心順ひ附て四方の英雄集まり此の如くの時天下を定るの  
 何の難き有んと吉日を擇んで虞氏と取り其一族の虞子期とのを擧用  
 ひて大將と十日を過しける所馳集る勢既ぬる十萬程及びる亦  
 江北へ押渡りて直に秦を伐んとす日打出ると會稽の民路を遮君此を  
 棄去る誰の民を治へんと大まか歎き悲多項梁乃ち曰ける我此城を取  
 る假の軍馬を屯して大業を圖心より大軍久し住らば百姓等を傷らん  
 此故の早く江を渡り秦を伐て天下の爲の殘暴を除き掃へんとする大願あり  
 他日事成れば會稽の屬する所十年賦税を免まべし汝等心を安んじて

家業を理る其中の賢徳の太守來り此所を安ん保べしと諭せば百姓  
 等へ之を聞衆皆喜回りける故項梁へ人馬を進り行所を誰と知らず  
 一隊の勢前を遮り人を通さざり如何なるものかと項梁の自出て望見ま  
 旗を真先の進ませ一人の大將頭を出風神峻烈威武雄健馬を躍ら  
 せ出来ま項籍の大音あげて汝如何なる者らと我大軍を阻つごと  
 問は彼者答て曰我は是六安の英布より古昔より七兵を出さる名有  
 之と正兵を汝無名の師を率て淮南を起すを次貝悪を爲んと與本止  
 我此故の遮りて討止んと爲ると曰項籍と云ぬて曰我は楚の大將なり  
 項燕の後項梁が甥項籍字の羽と云ぬるの秦の無道を見るゆ不忍  
 會稽の義兵を起し江東八千の子弟を降し今十萬の勢を以て楚國  
 爲の仇を報へ天下の爲の殘を除く何ぞ無名の師と曰んや其言のまじ

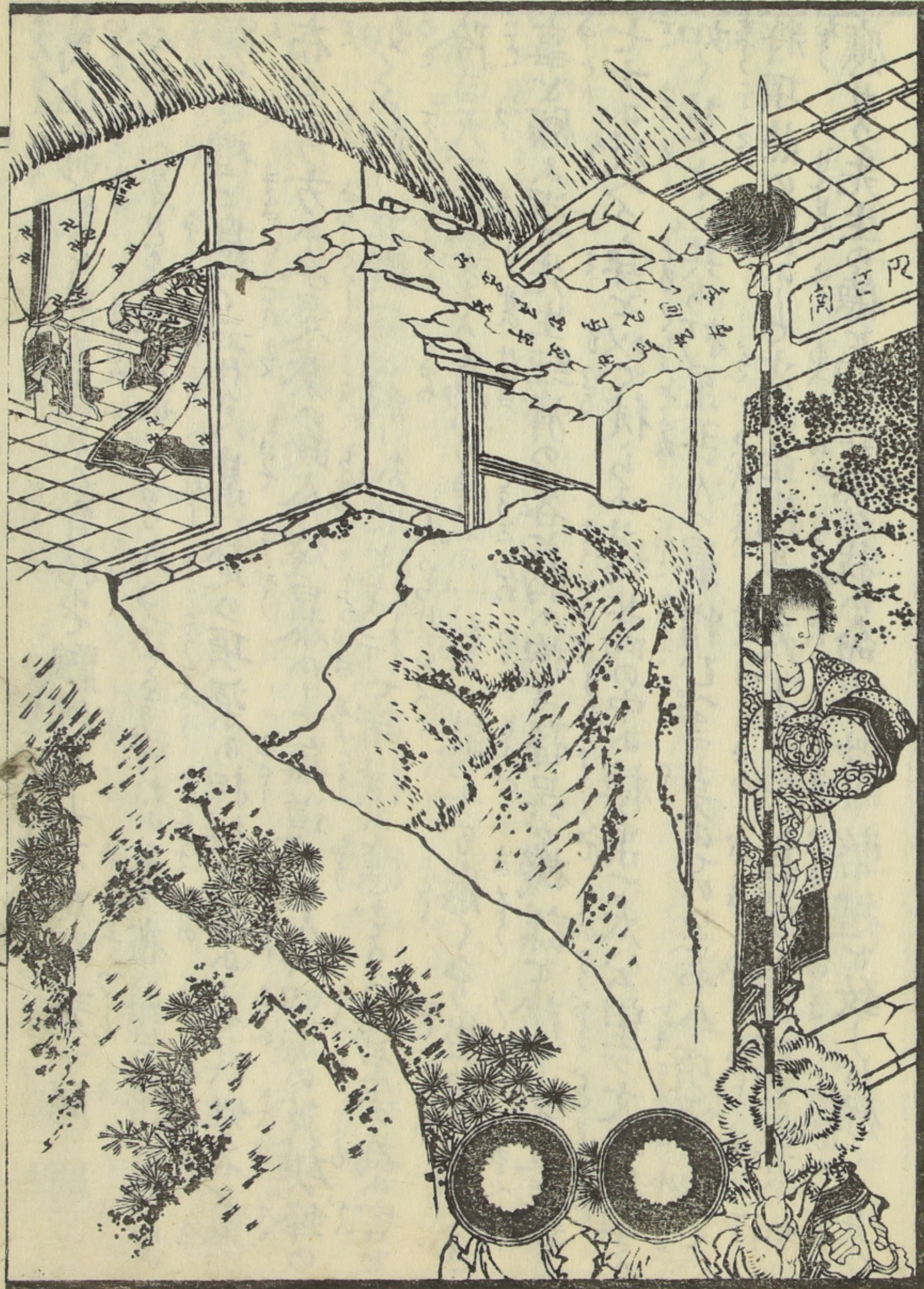
會稽の義兵を起し江東八千の子弟を降し今十萬の勢を以て楚國  
 爲の仇を報へ天下の爲の殘を除く何ぞ無名の師と曰んや其言のまじ



了らざる。桓楚一陣の馬を出し、英將軍早く降を我等既のこし楚の  
 眼せうと白の英布のこしを見て急ぎ馬より飛で下り、路の傍の拜伏し項籍  
 桓楚の打向ひ元より此人を知りしうりて尋ねる。桓楚回答して英將軍の  
 雄略の天下の敵まる者まきり、往日驪山の役を逃し江を渡りて我家の  
 隱まのり時約を成し賢徳の君を求てぞ切を立諸共の富貴を圖んと云  
 たり。今淮南の軍兵を聚らんと聞し程の使を馳て招んと思ふ折節幸  
 小と出合う。此人の這六安のて少うし時罪を侵し額の黥せしむ。故世の  
 又黥布とも歸せりと語まへ項籍の限る。喜ぶ英布を引具しと項籍が  
 前み出けし。英布へ茶く禮をさ。某久く主を求度のみ。今幸願ひ  
 適う。是より將軍の隨從て力を盡と云けし。項梁大まき昔て萬卒の  
 得易く一將の求難し。況て足下の如く。俊傑を得る。支喜び此上

不有と。酒宴を設饗應ら兵を推て進發せし。項梁が軍威まきり盛ん  
 ち。諸大將と秦を伐計略を議する所。季布進出で云けり。今淮陽の  
 居巢の范増と云のり。年七十七の及べども。智謀古昔の孫子。吳子。田  
 單廉頗もあぶま。若此人を得玉の天が下へ半半の中も待ぎのみ定ま  
 らんと。語まへ項梁打聞て我も久く其名を聞り。汝早行我爲招來を  
 命ざれば。季布の幣帛を備具し居巢の到り所の者。范増が家を問れば。  
 里人教て曰けり。此所より三里隔て旗鼓山と云山の常の城市の喧を嫌て  
 此山中の閑居せり。尔は訪人のりとのど。輕々く逢玉のと聞より。季布喜  
 びて。旗鼓山へ登り。此所彼所を尋る。いと幽る柴の戸の琴の彈音聞ゆ  
 且。疑も。是よりと心の思ひ立寄て。規ひ見まへ一人の翁蒼顔みして  
 鶴髪多。如何さる腹の甲兵を用ゆる術を隱し。胸の中へ敵の應じ手変





繪本海軍物語

十一

文海堂



季布旗鼓山に登て  
軍師を訪ふ

繪本海軍物語

文海堂



萬化の妙算と藏も爲らん骨格を飄然として不凡な琴を閣に問けり。今此所へ來るは又是如何なる人ぞと尋ねる李布の謹で幣帛と捧跪つし禮と爲つ云けり某の楚の項梁の相從る者にして其姓名と李布と云り方今秦の政令殘暴にして無道なり尔は四海の英雄の如く不起り立郡守を殺し知縣を伐行て諸侯の應むるは蒼生の爲害を除き天下を安んずる爲り故に一藝一能の士も悉く出て用ひらるる事と願ふ況て先生經濟の畧と胸を抱き孫吳の機謀と藏し且年七十七の及ぶ身と以て徒らふ逢蒿の中の棲果て太公望が文王の遇る如く草木と共に朽果玉への最惜むべき古史のひびきや今項梁の楚の大將項燕の後ひて文武並備まり天下の爲の義旗と揚四方響の如く應ぜり先生の徳を仰ぎ慕ひ我の命とせ此少幣禮と致し願くは先生

ト辞さる夏多く生平の才を展玉ひて天下の涂炭を救はるべし豈千載の美事と云ふやと語ると范增打聞て心中の思ふ様楚の天運を算見て其後蒼を爲んばと輕々しく幣禮を受納めんとも爲さるる李布の地上は跪つ累の狼心望む程の范増さるら云けり様我も久しく二世帝の殘暴にして世の中の黔首を腦と緯と知り余と平生此無道と誅する者無と恨む足下今の項將軍の命を受て遠く來り我を召まん爲玉ふ支能も我意の合さる足下暫時退き玉(明日志と決て幣物を受んと)回辞の李布は拜伏し我幸の先生を見奉る千金の玉を獲が如し若明日を待たば恐くは支の変わらん先生願ひ辞し玉つと受納てよと懇勸の說勸り且范増も遂に辞退かいたまは幣物を受納て李布と堂上へ伴ひ酒食を進め一病も叔其夜心靜み天の運氣を考ふる楚は是眞の天命を養う君のゆまれ足と跌て長歎し我過て



輕々く彼幣禮を受くる。良久後悔。大丈夫の一言に出て  
 再度返らざると思ひ。七次の日、李布諸共、草の廬をこぼし、  
 立出て項梁の陣へ赴け。項梁自出迎へ、上座引て曰く、我先生の名を  
 聞て日夜思ひ慕へども、軍務の暇なきものなり。行て見る言能を、昨日李  
 布を遣して聊禮を爲し、むの幸小と棄王を、爰の降臨を許され、縶の  
 喜悦さ、願ひ今より心を盡し、我不及と匡まよと聞て、范增再拜し、將軍の  
 世々楚の貴族なり。今此義兵を起して、無道の秦を誅せらる。誰か之の與せざる。  
 小人區々の一老翁、物料の何の才ありと。此重礼を蒙らん、願ひ犬馬の勞を辞せ。  
 力を盡して王業を補佐奉り、知遇の恩を報ぐべし。云、項梁打聞て其喜と  
 限る。扱項籍と諸共、天下の事を議し、ゆる機謀妙算鬼神も不測なる  
 所あり。大い敬まひ尊けり。其後人を遣して陳涉、吳廣が消息を如何と尋ね

聞ちしる。陳勝へ稍兵を率て陳の國を攻取り、勢漸震ひけ。王位即て大業を  
 圖王と勸る者、手下多し。有けん張耳、陳餘と云る者、是を陳て曰く、將  
 軍萬死の計議を。天下の民の爲、秦の暴を除くんと。然る今陳を取  
 陳王の位、即んぬ。天下の私事を示さず、只願ひ速く兵を率て西に向ひ、彼六  
 國の後を立、秦の敵を多くし。王へ敵多し、秦の勢不分支するべし。將軍  
 其虚の無王の王業、忽成しと諭し、聽む。陳勝、自陳王と號し、強兵を催  
 其二世皇帝、聞て、章邯を以て大將とし、司馬欣、董翳を副將とし、急之を  
 追討せし。陳勝へ一戦、小打敗らる。散々、洛行けり。部下の大將、莊賈と云  
 者、私に殺して、秦の降るを告げ、項梁大驚。我諸侯を糾合、陳勝を助  
 諸俱、秦を代んと思ひ、何ぞ圖候、忽に空しく、城亡失と、我輕々く不進と  
 眉と頻卑て沈吟、范增、打笑て、彼陳勝が敗る、固不當ると謂ふ。秦の六國



滅之時。楚國最無罪。懷王秦人王。再び及せ玉。いねい楚人。悉く憐之。到今て  
 歎う。故に楚國の南へ。公を人。能知ま。楚雖三戸。亡秦必楚也。彼南  
 公。南方の老人と。の云傳へ。何所の人と。知らねども。天地の道理。陰陽の道と  
 極し。神仙あり。今陳勝の事。のち。楚の後。せし。不立。七自立。王となり。  
 其勢。ひの長。いねい。是故。と知り。玉へ。豈陳勝。が亡び。を軍威。と折。き玉。ま  
 事。と。んや。と。理害。と。説。諸軍。の心。と。烈。けり。

譯者曰。三戸の説。區々。或は地名を提擧。て三戸亭。又三戸津。  
 三戸峽。と云。臣瓚。續林。が鮮。いねい。楚國。の秦。と。死。事。深。き。故。  
 三戸。と。い。ども。猶。以。て。秦。を。亡。ま。す。の。足。ま。り。と。云。り。童蒙。の。為。小。里。言。は  
 楚。の。一。族。が。只。三。軒。殘。り。居。て。も。秦。を。亡。ま。さ。ら。ん。と。云。り。夏。多。と。

訂正 補刻

繪本漢楚軍談初輯卷之三



